

我が家の犬猫たちは今、完璧な共存共栄で、いわゆる内部抗争的な動きは全くない。先代の犬たちは曰く因縁を抱えていてなかなか大変だったのだが、当時を知る唯一の犬のベベが根っからの平和主義者なこともあり、争いとは無縁の日々だ。

長年同じ屋根の下で暮らしていると種の違いを超えて意識が共通化していく。エサやおやつに対してのねたまそねみはあるものの、いずれ必ず自分にもあてがわれるという安心感が共存共栄の基礎であろう。

暮らしの底上げ



普段はいまいち疎いおじい私だが、NHKの貧困女子高生報道へのバッシングの問題は、今を生きる人々の気質の向かう先について考えさせられる。映像に映った女子高生の部屋の光景から、なぜこれが貧困かといった類いのバッシングが渦を巻いたという。

このような重たい問題にあらためて向き合わせてくれたのは、連合も主体的に関わっている「連帯社会研究交流センター」の連続講座の第二回、阿部彩さん(首都大学東京教授)による講義「子どもの貧困——解決策を考え

そしてこの二十年近くで子供の貧困率は約一〇%から一六%へと拡大してきたのだ。先週号で、タイの格差社会の話を書かせていただいたが、日本と大きく事情が異なるのは、足もとの格差はひどいが、そこからは良くなるはずだというトレンドの向きである。一方の日本の場合には格差がひらき続けている。中間層の厚みも相当に棄損をしている。

ネットの世界で根強い自己責任論は本来は、問題の本質とは無縁の矮小な議論である。さまざまな事情で困難な立場にある人間

人間の世界も理屈は同じことなのではないかと思う。ただ、我が家の規模に比べれば、社会の大きさは圧倒的に(というか、比較対象には不適切なほどに)巨大である。そしてその時の雰囲気の流れがマスの人口規模の人間たちの命運を左右していく。そのようななかで人々が将来に向けた展望を持ち、自分自身の生活設計に確信を持っているか、社会はそれを支えうるものとなっているか……

ネットでどんなことが飛び交っているのか、

る」であった。

数多くの示唆をいただいたが、特にこの種の問題は、より多くの人たちに認知されたいと問題の解決につながる。

例えば、この問題の対象の規模はどの程度なのかということである。児童養護施設の三万人や生活保護世帯の三十万人のみならず貧困率一六%に相当する三百三十万人という規模を認識しなければならぬ。一部のケースというより、社会のそここみにみられる普通の状況の問題だということである。

第34回

負のスパイラルを脱するために

を慮る^{おもはんが}気持ちと政策的な課題解決の両面をマッチさせないと社会はおかしな方向に行ってしまう。事柄の性質は全ての生活者に関わっているものなのだ。同質社会のねたまそねみを克服して、負のスパイラルを脱却していく。

連合
会長 神津里季生



こうづ・りきお 1956年、東京都生まれ。東京大学在学中は野球部マネジャー。卒業後、新日本製鐵株式会社入社。新日鐵労連会長、基幹労連中央執行委員長などを経て、2015年、日本労働組合総連合会会長に就任